



Donor Conception Canada (DCC)

～カナダの親のためのグループ～

Interviewee

Vince Londini

Chair and Co-Founder of DCC

Q. 精子提供で父親になった経緯についてお聞かせください。

カナダのオンタリオ州西部のロンドン市というところに住んでいる。(オンタリオ市から車で2時間離れた郊外)。米国で生まれ育ったが、2000年6月にカナダに移住した。

1994年に妻のLoriと結婚した。子供が欲しかったが、なかなかできなかったので自分から検査を受けた。その結果、自分が不妊だとわかった。それはものすごく大きなショックだった。無精子症だったので、妊娠の可能性はゼロだった。最初の3年間は、何も治療をしないまま過ごした。

カナダに移住し、健康保険を使って不妊クリニックで治療を受けることができるようになった。養子について調べはじめ、Beginnings Family Servicesの研修会にも出席した。最終的に、妻が自分で子供を産みたいと言ったので、精子提供に決めた。精子提供を利用することで、妻とともに家族を作ることができた。

1990年代半ばから不妊治療クリニックでカウンセリングをやっていたDr.Jean Hayesから夫婦でカウンセリングを受けた。彼女は、患者が選択した生殖補助医療について、それがどのようなことを意

味するのか、子供にどのように伝えるかをカウンセリングしていた。

彼女のアプローチは当時の医師たちのメジャーな態度とは異なっていた。医師たちは完全な匿名を好んでいたから。Jeanからカウンセリングを受けられたことを良かったと思っている。それは自分の精子提供に対する態度を方向づけるものだった。

妻との間に3人の娘が産まれた。2005年に最初の娘が、2006年に2人目の娘が、そして2008年に流産があり、2010年に3人目の娘が産まれた。

当時、カウンセラーのJeanが患者のためのサポートグループを開催していた。自分と妻はそれに参加していた。当時のことで思い出すのは次の2つのことだ。自分と妻が出ていた養子縁組の研修会には20組ものカップルが出席していたこと。そして、Jeanが主催していたサポートグループのミーティングで、同じように不妊の問題を抱えた人たちと経験を共有できたこと。2010年にJeanが退職し、そのグループのコーディネートを引き継いで欲しいと言われた。

Q. このグループの概要について教えてください。

Donor Conception Canada (DCC)はもともと、Southwestern Ontario Donor Conception Networkという名前だった。英国のDonor Conception Networkに着想を得ている。それから、オーストラリアのビクトリア州にある色々なグループからも。

1997年から2010年までJeanがサポートグループを主催していたときは、彼女のスケジュールが空いた時間に非公式に行なっていた。当時の標準型は対面でのグループミーティングだった。メーリングリストを作ってメンバー登録し、図書館



の一角をレンタルして、20-80 人もの人たちが出席した。円になって全員が順番に話した。

現在、パンデミックで対面でのミーティングは中断されている。2020 年からは、ビデオ会議システムや ZOOM を使ってミーティングを行った。現在、当事者による二種類の自助グループ方式のミーティングを行っている。一つは、バーチャル・グループで、その時間帯に時間がある人はそのテレカンファレンスに参加できる。だから、コスタリカ、米国モンタナ州、米国バージニア州、カナダ全土 (ブリテッシュコロンビア州、アルバータ州、オンタリオ州、ケベック州) から参加している。

もう一つは対面のグループミーティングで、パンデミック前には、ロンドン市とトロントで定期的に対面のミーティングを開催していた。パンデミックが落ち着いたら 2022 年には再開したいと思っている。バンクーバーでも新たにミーティングを立ち上げたいと思っている。

オンラインミーティングは、もっとフォーカスを絞った会話をする機会になった。例えば、donor conception で子を持ったシングル親のための ZOOM ミーティングを開催した。他には donor conception でまだ小さな子供を持つ親のための ZOOM ミーティング、また、これから donor-conception を利用したいので調べている段階の人たちのための ZOOM ミーティング、などなど。パンデミック以降、こうした的を絞ったミーティングは 60 ほどにもなった。

現在、DCC のメーリングリストには 400 人以上の登録があり、そこでミーティングについて告知している。フェイスブックには 380 人のフォローがあり、ほとんどがオンタリオ州の在住者だ。現在、公式のメンバーシップ制度はなく、会費

も取っていない。ミーティングの時に寄付を募っているほか、業界の関係者から少額の寄付をもらっている。しかし、自分としては、業界の関係する企業やクリニックの影響からは距離をおいて独立していたいと思っている。DCC では、出版物を出していないが、色々なサポートやメリットを会員に対して提供している。

DCC は、ビデオ会議でのミーティングが始まる少し前に、連邦の NGO に組み入れられた。それにより、少額の予算がついているが、フルタイムの職員はいない。だからグループはまだボランティアの力に頼っている。NGO となったとき、名前を変えて、公式に DCC という名称になった。それによって、グループの活動は自分がいなくなっても継続できるようになった。(この頃、自分は健康状態が非常に悪かった。今は回復したが。)

DCC がどこかのエージェントと直接連携しているということはない。DCC では、エージェントに対して、権利擁護活動を行なっている。その結果、エージェントの活動には変化が生じてきている。例えば、Seattle Sperm Bank では、完全に匿名のドナーは扱わなくなった。

DCC のウェブサイトには、たくさんのリソースが載せられている。例えば、男性不妊について自分の経験を語ったものがメディアに掲載されたことがあり、その時の資料をみることができる。

Q. 政府や政治に対する働きかけは行っていますか？

カウンセラーの Jean が、Canadian Fertility and Andrology Society のメンバーに掛け合っていた。これらの団体が政府に対して助言を行なっていたから。今は、彼女はリタイアしたので、自分が代わりに学会に出席している。学会では、



業界のすべての人たちが一同に会する機会なので、業界について知り、彼らに自分たちの活動を知ってもらい、影響を与えるための重要な機会になっている。

DCCでは、フィードバックを求められることがあり、**Canadian Institutes of Health Research**にも参加している。例えば、同団体では配偶子提供の利用についての規制を公表したが、それはDCCのフィードバックに基づいている。

Q. メンバーの構成について教えてください。

オンラインミーティングの現在では、人数を正確に算出するのは難しいが、パンデミック前の対面ミーティングに基づいて算出すると次のようになる。

精子提供が70%で、卵子提供が30%(グループのルーツは精子提供)。男女カップルの精子提供の場合、両親は子供に事実を告げるのか、告げないのか、という問題が典型的にある。両親は、そのことについて話し合い、理解したいと思っている。彼らがdonor conceptionたどり着いたのは不妊が原因。だから、彼らの疑問はこうだ。それはうまくいくのか? 子供をちゃんと愛せるか? と。最近では、卵子提供についての参加者が増えてきている。

50-60%がヘテロカップル。後の40-50%がシングルの母親(または一時的なシングル男性)。2020年3月の段階で80人の参加者がいた。そのあと、ヘテロカップルとシングルの母親が半々に分かれた。

約5%は、LGBTQの参加者だ。(レズビアンカップルまたはシングル)。DCCでは、クイアの親のためのグループミーティングを提供している。しかし、実際のところ、ゲイやレズビアンコミュニティでは、この分野のサポートを自分たちでカバーしている。

現在、8割の参加者が白人、残りの2割がアジアや東南アジア、またはアフリカ系の人種グループだ。

DCCを含めて、子供に告知しない人は、サポートグループには参加しない傾向がある。現在のところ、カウンセリングは必須ではない。クリニックでは多分1回くらいはセッションを提供しているが、それは顧客が安定的な生活を送っているか、支払い能力があるかどうかを評価しているだけ。本来はインプリケーションカウンセリングが制度化されることが理想だが。

Q. 組織の運営で、難しい点がありますか?

DCCは、もっとマイノリティの集団に関与する必要があると考えている。グループの多様性を広げたいが、難しい点や限界は、DCCのリーダーである自分がヘテロの白人男性だということ。6人に1人のカナダ人が不妊だから、DCCのコミュニティ以外でも、多くのdonor conceptionが行われていると思う。オンタリオ州だけでも10万人もの人がdonor conceptionから生まれているはずだ。それらの家族のうち、エスニックコミュニティの家族の場合、そのことはタブーなので他の人に言うことはない。

Q. 他国の団体との交流や情報交換の機会はありますか?

英国のDC Networkのリーダーと話をしたことがある。そして、どうしたら組織をよりよく運営していけるかのアドバイスを受けた。その段階では、DC Networkではメンバーシップ制度を採用していなかったが、将来取り入れるだろうとのことだった。



Q. カナダで、生殖補助医療はどのように行われ、規制されてきたか、教えてください。法改正の動きはありますか？

カナダは、他の旧大英帝国領に続いて1950年代から精子提供を行なっている。それ以来、同じ哲学とアプローチによって行われ、徐々に実施数が増えてきた。1990年代初め、新しい生殖技術に関するRoyal Commission(the Baird Commission)がひらかれ、1994年に報告書が公表された。その報告書では、政府の規制が必要だということが勧告された。それは、論争的な政治問題で、政府は報告書の勧告を採用しなかった。政府が法律(Assisted Human Reproduction Act)を制定したのは、2004年になってからだった。

カナダでは、連邦政府と州政府の間に対立がある。ヘルスケアについては、各州の主権が維持されている。だからこの分裂を克服するため、特定の行為(研究室における非倫理的な行為)を違法化するために刑法が制定された。それによって配偶子を売買したりするような、代理出産を含めた生殖サービスに支払いをすることが禁止された。この法律は全州において効力がある。ケベック州では、この規制に関して論争があり、最高裁でも争われた。その結果、刑事罰はやりすぎであり、刑法はそのような構造を支えるべきではなく、規制枠組みは強制されるべきできないということだった。このため、犯罪の要素は残っているものの、具体的な規制枠組みはない。そして各州政府は、それ以降、業界を規制するには至っていない。自分はこの件で大臣にも接触を試みたが、アポイントは取れなかった。

Health Canadaは2019年まで、行為規制の必要性には言及しなかった。このことは、臨床家らは、ほぼ、自分たちの好きにできるということで、彼らの行き過ぎ

を制約できるのは世論だけの状態だったということ。Baird Commission以来、25年経つが、その時の勧告はまだ全部達成されていない。

Health Canadaが海外から持ち込まれる精子や卵子について感染症コントロールについての規制を発表したのは最近のことだ。自分はその規制を読み、的を射ていないと思った。

カナダで使われている配偶子の大部分が米国からの輸入に頼っている。規制では配偶子への支払いは禁止されているが、米国から配偶子を購入することを阻止できていない。

例えば、自分と妻は、米国アトランタにあるXytexという精子バンクから精子提供を受けた。それらの提供が、カナダの規制に合致しているかを証明するのはカナダのクリニックの責任になる。

現在の規制は、テリングやカウンセリングや出生証明書の問題などの倫理的問題については何も言及していない。

カナダのコンテキストに沿ったもので自分がオススメできるのが次の本だ。

Assisted Reproduction Policy in Canada (Dave Snow)

The Right to Know One's Origins (Juliet Guichon ed.)

Q. ドナーの匿名性について、今後、カナダでも廃止の可能性はありますか？

配偶子バンクの中には匿名性を廃止するという考えを支持してきたところもある。クリニックは、それに同情的だが、完全な匿名性を約束しているところもまだある。これは、非現実的なマインドセットで、子供を得るのにもっとも近道なアプローチが欲しいと言う考え方から来ている。それは、十分に考えていないし、包括的でもない。



これまで、政党がこの問題に取り組まない理由があり、法的変化は起こりそうにない。

カナダには法律を改正する動機がない。規制に関してトップダウン型は機能しないので、草の根の運動はある。関係する人々の間で透明性、オープンさ、共感を作り出すことが必要。特に、まだ生まれていない子供の視点が重要で、子供に自由を与えること、そして将来は自分のアイデンティティを探求することができる能力を保証すること。社会的には、不妊に対する忌避感はまだある。

カナダのトロントで活動している **Barry Stevens** という映画製作者の作品がおすすめだ。

彼は、1990年代から映画を公表している。それは、自分のためにドナーを見つけようとする彼自身の物語だ。その過程で彼は80人ほどの半きょうだいを発見する。そしてそのうちの一部の人々との会話を45分のドキュメンタリーに納めた。Barryは、**Donor Conceived Alliance of Canada (DCAC)**のメンバーだ。DCACは、ドナーから生まれた人たち(彼らは親からテリングされておらず、後になってそのことを知り、裏切られたと感じている)の権利擁護をしているグループ。

2018年に、現在の政府によって、生殖サービスや配偶子に対する支払いを禁止する法の改正が前進しそうになったことがあった。DCACは、この変化に反対する証言をした。その結果、法改正は失速し、前に進まなかった。

Q. 海外での治療を選択するカナダ人は多いでしょうか。

東ヨーロッパ圏に行く人たちがいる。そこは費用が安くつくことが魅力になっている。

しかし、ほとんどの人が米国に向かう。国境を超えた不妊ツーリズムはそのうちまた変化するだろう。しかし、カナダで使用される精子のほとんどが米国から輸入されている。輸入にまつわる色々な制約を減らすために自分自身が米国に移動する人たちも多い。

“stranger-known”(※全く知らない人から対面で精子を受け取る行為)のような形での精子提供が出現している。例えば、DCCは、ドナーとしてサービスを提供したいという男性からのアプローチを複数、受けた。インフォーマルなアレンジメントが増えてきているようだ。例えば、Tim Hortonsのようなコーヒーショップで会って、精子を手渡しするなど。将来の子供のアイデンティティに関して、この方法にはたくさん問題がある。そして、メディアではネガティブに報道されている。そして、法的な意味での親子関係が曖昧になる。(ドナーは法律上、子供の親なのか? もしそうだとするなら養育費を支払わなければならないのか? など)

Q. テリングしない親の場合はDCCのメンバーになるのが難しいでしょうか?

DCCは、事実を明らかにすることを支持している。だから匿名性に賛成しない。

グループではどのようなすればポジティブに受け取ってもらえるか、テリングについて、多くの経験がある。テリングしない親はDCCのミーティングには参加しない。

Q. お子さんが3人とのことですが、ドナーに対する興味関心に違いは見られますか?



自分の経験では、娘が3人いるが、どの子もドナーには興味がないようだ。それは多分、ドナーのことを隠し立てしたり、秘密のように扱ったりしていないからだと思う。知りたければドナーファイルが家に置いてあるからいつでも見られる。そこには、謎も秘密もない。不快な気持ちもない。

2、3年ほど前に、娘たちに23andMeに登録したいかと聞いたことがある。カナダでも遺伝子検査が流行っている。娘たちは同意して全員がテストを受けた。というのは自分自身も、もしかしたらクリニックで誤りがあって違う精子が使われていたりしないか、確認したい気持ちがあった。結果はすべての娘が同じドナー由来だったのでホッとした。

2018年に娘たちはDonor Sibling Registryに登録した。しかしまだマッチングしていない。他方で、登録していた遺伝子検査のネットワークから、半兄弟からの礼儀正しいコンタクトがあった。今年の夏、彼の母親と一緒にピクニックに行った。彼らはここから2時間離れたところに住んでいる。今の所、半兄弟という言葉を使っている。しかし、他の言い方を検討してもいいかもしれない。この関係をどのように呼んでいいか、自分には確信がない。

Q. DNA 検査に関する具体的なエピソードはありますか？

遺伝子検査は、カナダで流行っている。自分と家族は、最初、娘の半きょうだいを見つけられないかとDNA検査を利用した。もし見つければ、娘が望めば彼らと交流することもできると考えたから。しかし、今は、もし相手方がドナーから生まれたことを知らない場合、この

検査は危険なのではないかと懸念するようになった。

“Half of Me”というpodcastがある。それは米国の東海岸出身のAllyという女性が制作したもの。彼女は20代の後半にドナーから生まれたことを知った。怒り、悲しみ、好奇心が湧き、自分の経験についてpodcastを作った。彼女は23andMeを使い、半姉妹からコンタクトされたことがきっかけでドナーから生まれたことを知った。このような状況は、自分はよくないと思う。

Louise McLoughlinという英国のレポーターがいて、彼女もまた最近podcastをリリースした。彼女はドナーを探し続けてそれに成功し、ドナーにインタビューをした。

Q. ドナーや代理母とどのような境界をつくりますか？

告知は、何度も繰り返すプロセスであって、一回きりの出来事できない。自分の経験では、DCCの一部には子供に1回だけ伝えたという人もいるが、子供はそのことを覚えていないだろうと思う。だから、子供がそのことを再び発見したとき、悲しみとショックを経験すると思う。

自分と妻が家族を作るために利用した方法は、子供達の権利と自由を尊重したものだと思っている。もちろんそれは、子供を持って育てるという自分の欲求を達成するものでもあったのだが。

Donor conceptionで家族を作ること、それはまさに意味をつくるということだ。Donor conceptionに関するオンラインフォーラムの多くが、特定の言葉の定義の矛盾をめぐるものだ。しかし、それは、まさにそうしたやりとりを通して意味を作っているということだ。



それはドナーから生まれた子供にとって何を意味するのか? 半きょうだいをどう呼んだらいいのか? 友達? 半兄弟? 半姉妹? 我々はそれらの関係から何を作るのか?

自分の場合は、それはあくまで他の家族であり、自分たち家族とは異なる。そして、彼らのことは最近まで知らなかった。それは、今まで経験されていなかった領域だ。

Donor conception に関して、意味と関係性を作ることについて、自分が思いつく研究文献がいくつかある。

- **Relative Strangers: Family Life, Genes and Donor Conception** (Petra Nordqvist and Carol Smart)
- **Relatedness in Assisted Reproduction: Families, Origins, and Identities** (Tabitha Freeman, ed.)
- **Random Families** (Rosanna Hertz & Margaret K. Nelson)
- **The New Kinship: Constructing Donor-Conceived Families** (Naomi Cahn)

Donor-conception で作られた家族の生きられた経験について、たくさんの本があり、いくつかは古典的な部類に入る。他には、Eric Blyth, Ken Daniels, Caroline Lorbach, Diane Ehrensaft などの研究者が思い浮かぶ。

(2021年10月)

Mr. Vince Londini

Donor Conception Canada(DCC)の議長で共同設立者。

カナダのオンタリオ州に在住。

自身の不妊発覚後、米国からカナダに移住し、精子提供により、3人の娘をもうける。子供たちにはテリングしている。

DCCの前身である The Southwestern Ontario Donor Conception Support Network を創立者の引退に伴い引継ぎ、当事者へのサポート活動を充実させている。

- **Infertility upended his notions of what it means to be a man and husband**
CBC News, Jan 03, 2020
- **Support groups help men deal with loneliness and stigma of infertility**
THE GLOBE AND MAIL, Apr 22, 2019
- **We are family**
Inside, London Health Sciences Centre
2013